
特集 2 小児医療の新しい流れ

【巻頭言】

香 美 祥 二 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部小児医学分野)
松 岡 優 (徳島県医師会生涯教育委員会)

現在、わが国は少子化が急激に進行すると共に、核家族化、都会化(24時間昼型社会)、女性の社会進出などの状況のもと社会・地域・家庭での育児機能の低下の問題に直面している。このような時代だからこそ国民は一層、子どもが無事に生まれ健康で健やかに育つことを願い、病気の子どものための新生児医療や小児医療の充実・進歩に厚い期待を寄せている。幸いなことに、この十年間の間に小児医療は急速な進歩を遂げ、従来は治療困難とされていた多くの難病も治療法、管理法の進歩により慢性疾患として普通の子どもと遜色なく家庭・学校生活をおくることも可能となっている。体重が1Kgにも満たない未熟児さえも後遺症なく成育することが実現している。さらに、遺伝子診断法や医療機器の進歩によ

り子どもに負担をかけずに正確に病気の診断を行ったり、疾患予防の観点から病気の発症を未然に防ぐ予防医学も発展しつつある。そこで本特集では、各々が徳島大学病院や市中病院で新生児・小児医療の各分野(小児保健、新生児医療、小児神経疾患、循環器疾患、腎臓疾患、血液腫瘍疾患、生活習慣病)で活躍し、わが国の小児医療の発展を牽引しておられる先生方に、最新の子どもに関わる医療の現状、新しい小児医療の流れを報告していただく。

本特集が読者にとって、現在、確実に発展し変貌つつある小児医療の姿と今後の在り方を理解する上で役立つことを期待したい。